

「コラム」日本人の旅—発見の楽しみ

池内 紀

1 旅は第二の人生

旅は第二の人生と考えています。第一の人生、第二の人生という言い方をしますと、旅は第二の人生であろうと思います。第一の人生というのは、生活があり、暮らしがあり、日常があり、その中で往復する。我が家と仕事場、自分の居場所と勤め先との往復、たまに例外があるとしても、ときたまのささやかな例外。日常的なコースを往復して、そこは当然安定しているわけですから、安心できる場だということもできます。そういう生活を何十年か続けて、この社会に対する役割を終える。ひととおりの自分がこの世で生きている責任は果たしたとも言える。

そのあとには第二の人生で過ごしたい。第二の人生の大きな柱として旅、旅行を考えています。これまでの日常のコースと違って、「非日常」です。旅は楽しいものだと思いますが、古人は「旅は憂いもの辛いもの」と言っています。いろいろな危険があり、不安があり、場合によっては命をなくしかねない。安全が保障されないものであって、嫌なことがある。現在だって旅は必ずしも楽しいものではない

わけだし、安全を保障しないし、安定していません。

常を抜け出すからです。一応予定を立てていても、安定は必ずしも保障されていない場所に身を置くということとは、とてもいい。日頃眠っている感覚、見たり聞いたり感じたりする能力が活き活きしてくる。たとえば道に迷ったり、乗るべき電車を乗り過ぎたという場合、とたんにはっとして、目も耳も元気づきます。いわば「感覚が再生」する。第二の人生に立ち入った年齢では、感覚は身体の能力と同じように衰えてきます。これがもし日常的な生活だけで終始すると、もともとその衰えが早いだろう。非日常の時間を持つことによって、たえず緩みがちな自分をもう一度再生できる。だから第二の人生としての旅ということを考えています。

幸い、この旅は行って、また戻って来れる。第一の人生と同じように往復が基本です。ただ、往復のスケールとか広がりがあり、これまでの日常の場合とは違う。

死というのは、第三の人生だろうと思っ

たぶん、そのうちに第二の人生が終わりを見て、第三の人生に行く。これは行きつばなしで戻って来れない。だから、第三の人生については講演できない。ただ、案外、第三の人生というのは未知の旅として、それほど捨てたものではないのかもしれない。けっこう面白いことが体験できるのではないかと思っています。

2 旅の準備

よく旅をして、旅のエッセイを書いたりしています。外国に行くのと滞在が長いものですから、そういうものも全部勘定に入れると、一年の四分の一近くは旅をしています。ふらりと出かけたり、気まぐれにコースを変えて、さすがだとかよく言われるのですが、そのふらりと出かけるとか、気まぐれにコースを変えるとか、随分気ままなようです。それは大変な誤解であります。きちんと準備をしているわけです。実は、旅の準備は、しすぎることはない、旅のいで立ち、旅のハードにあたる服、下着、靴、リュックサックなどが、仕事部屋兼遊び部屋の壁際にずつとあって、リュックサックが大中小ミニとあり、また、窓のカーテンレールに小さな袋がさがっていて、それには薬が入っていたり、小道具が入っていたり、帽子がかかっていたりします。帽子でも冬用、間の季節、夏用とあります。他人から見れば無秩序の見本でしょうが、私から見れば非常に整然と並んでいます。こんどあそこに行こうという、たちど

ころにこれは選んで、これは置いておく、という判断がつく。

ソフトの面、知識、情報、それもやはり日頃から非常に丹念に、新聞や雑誌の記事を切り抜いて貼り付ける、ファイルしています。日頃からたえず注意を払っていて、ここは前に行き損ねたところだとか、このあたりは行ってみたいところだ、こんな街があったのか、気がつくたびに非常に小まめに整理するわけです。暇なときに、こんどは整理したものを大まかに分類する、大まかな地域とか、海とか山とか、春がいいところ、山がすきですから夏山で面白いところと、そういう具合に自分なりの分類をする。それがファイルにたまっていきます。

そういういでたちと情報の両面を日頃から準備しています。ふらりと行けるのは準備があるからふらりと行けるわけです。気儘に変更できるのは日頃の仕込みがあるからであって、ふらりと気儘は、逆に非常に勤勉な側面を示している。人様に見せるものではないので隠しているだけで、実際は非常に小さなお金を積み上げていくようなことをいつも続けた上で、それでふらりと行くわけです。ふらりと行くというのは一種のダンディズムみたいなもので、自分のスタイルです。我が仕事部屋にあるファイルをご覧になると、こういうことをやっている人なのかという全く別の姿があるかもしれません。おそらく旅上手な人は皆さんそういうことをやっているだろう。芭蕉さんもおそ

らくそういうことをやっていただろうと思えます。自分を芭蕉さんに比べるのはとても失礼なことですが。

土地の名前から始まって旅好きには絶えずさまざまな形の好奇心があるものですから、それも自分のものにした。自分の感覚、目で見た、耳で聴いたり、手に触ってみたい。そういう好奇心が旅の原動力だと思います。お金はなくても好奇心さえあれば、第二の人生は豊かに過ごせるのではないかと思っています。

3 房総探訪記

私は東京住まいですから、近くに房総半島や伊豆半島があります。小旅行の場合、いつもその辺りを考えて、季節によって選んでいます。海辺ですから普通は夏がいいと言われるのですが、海は冬がよろしい。人が全然来ない。海は非常に広いです。人間がいないと海はこんなにも広いかと思えます。海辺の蟹だとか魚だとかいろんな生き物は、人間という非常に凶暴な動物が来ないと、とても安らかに海辺で遊んでいます。

山の動物もだいたいそうですね。動物は学習しますから、人間が来ないときは、動物は非常に安らかです。禁猟区などで時間が設定されていて、この日より猟をしてはいけないというその明くる日に行くと、山道のすぐ側で狸が寝ていたりします。どこで知るのでしょいか、今日から危ういやつが来ない、というのがわかるみたいです。海辺

も冬場に行きますと、海が広くて、波打ち際にいろんな生き物がいて、ほんの一メートル四方でも小さな生き物が何十といます。だから埋め立てをすることが、どれほど大変な殺戮であるか、冬場の海に行くときよくわかります。

東京から房総へ行くとき、内房線と外房線と二つありますが、内房は電車がよく走っていて、外房は電車が少ない、こういうときは不便なところを選びます。その方がおもしろい。

その不便なところから少し入ったところに大多喜という町があります。先日、三日ほどいました。私の好きな房総半島の城下町です。房総半島に城下町があるのかと驚かれるかもしれませんが、れっきとした十萬石の大多喜藩でした。ただしそれは初代だけで、二代目になると五萬石、三代目になると二萬二千石に、急激に降格していった。大多喜藩の石高がどうして急激に減ったのだろうと、それが不思議でした。初代は徳川家康の四天王と言われたなかなかの人物で、十萬石という大きな藩だったので、二代目に半減して三代目にまた半減する。そんなにほんくらが続いたのかというのがまず関心の一つでした。何かでファイルしていたんでしょね。

もうひとつは、『日本見聞記』という古い本があつて、異国の人が書いたシリーズの代表的な一つですが、ロドリゴというメキシコ人が書いています。大多喜藩が五萬石になった頃の日本です。どうしてそういうメキシコ人が日本にいたのかと

いうと、もともとフィリピンのスペイン領土の提督をしていた人物で、任期が終わって国に帰るにあたって船が遭難し、房総沖に流された。当時は鎖国がそれほど厳守されていたわけではなかったにしても、やはり異国人に対しては、禁令に近いものであったはずですが、大多喜藩の二代目藩主は遭難した人たちを全員手厚く持てなして、後に江戸から無事帰国させる手続きをとった。そのことを非常に感謝してロドリゴは『日本見聞録』を書き、ずっとのちまでそのことが縁となり、メキシコ大統領が来日したときに、大多喜に表敬訪問をして、記念となるものを置いていった。それを記念してメキシコ通りができた。

房総半島に城下町があつて、そこにメキシコがある。ヘンといえばヘンですが、海に開いた土地の開放感がそういうふうに見えるのでしょうか、ごく自然にメキシコ通りを歩いている。メキシコの国旗を象ったオブジェがあつたりするので、すこしも異様ではない。その大多喜が好きなのは、町づくりがよく考えてされているからです。全国あらゆるところで町づくりという言葉がスローガンのようになっていますけれども、その大多喜の町の例でいきますと、あきらかにこれは条件の悪い町です。地方の中・小都市は、商店街が散々な状態です。いわゆる郊外店のような大きなものができるたびに商店が寂れていく。房総半島の人口二万の町の商店街も、大多数が廃業、普通だったら寂しいあるいは怪しい通りです。そこ

で町はどうしたかというところ、町を活気づけようとか、もう一度繁昌させようとか、そういうことはいつさきもう考えない。それは不可能である、そのかわり、過去を生かすことにした。嘗てここは城下町で、古い商家の建物が非常に重厚で、なかなか威厳のある建物を造っていた。それがかなり残っている。現在、それが商店としては成り立たないわけですが。それを町が、寄附してもらったり、安く買い上げたり、土地を借りたりして、廃屋になっているものを補修したりして、かつて江戸時代に商店としてあつた、あるいは明治時代に商店としてあつたその形に戻した。技術をもった人たちがまだいますから、補修にそれほど費用がかからない。それを町の資料館とか、会合の場とか、空き地であれば小さな公園にする。年寄り歩いて休めるようにベンチをつくる。それだけです。余計な飾りはしなくていいけれども、建物は古い建物を活かす。空き地は公園にする。商店としては嘗ての繁栄などは目指さない。そういう考え方で

私は正しい考え方だと思いました。本来町の人達が静かに住める町にすればいいわけで、繁栄などは考えない。住んでいる住民構成からいっても、安らかに過ごせる空間があればいいという考えです。その考え方に感動しました。いい町だなとおもったのは、町づくりに対する原則をきちんと守っていることと、町役場が非常に質素だということと。いろいろな町に行きましたが、町の庁舎を

やたら豪壮にする町はよくない町ですね。あるいは、わざわざ不便なところに随分お金をかけてつくるといふのは、だいたい嫌な町です。そういう町はだいたい町の人のためのベンチなどはいっさいないですね。大多喜町の町役場は、いい建築家が設計したいい建物でした。簡素で、装飾がなく、しかも入り口に階段がない。入ると職員がみんなこちらを向いて仕事をしています。背中を向けていない。来る人達にすぐ対応できるという座り方です。

それから小学校が非常に見事な建物でした。建築家が随分工夫して造ったのでしよう。小さいけれども後ろの城山とお城を上手に取り込んで、広い校庭と三角屋根を持った棟と別棟が有機的につながっている。運動場から見ると非常に空間が雄大に見える。明らかに設計者が空間を活かして造っています。私はそういう小学校を造る町はいい町だろうと思っています。

泊まった宿は江戸時代からやっているという宿でした。建物は明治の初期だとおっしゃっていました。時代劇にみかけるような帳場格子があつて、長火鉢があつて、昔ながらの帳場格子があつて、大時計があり、大黒柱があり、古い建物が非常に上手に使つてあつて、しかもトイレは新しい。私たちが古い旅館で一番辛いのは、トイレです。ここでは和風と洋式両方が備えてありました。トイレとお風呂は現代で、あとは明治初期のままにやっています。そうすると不思議なことが生じてく

る。古いもの、その古さが非常に新しい。普通で言う新しいものというのは刻々と古びていきます。例えば京都駅の豪壮で不愉快な建物、人を威圧してやたらに上から覆い被さる建物です。あれは新しいデザインで、新しい素材ですけれども、それは刻々と古びていきます。おそらく仮に二十年経つと、メンテナンスも大変ですけれども、古い建物だときつと思うでしょう。新しさは常に古くなるだけですけれども、その大喜の小さな旅館は、古いから非常に新しい。こういう時間を超えた中の、日常ずつと使われてきたもののもつ、生命力、それは馬鹿にしてはいけません。それは非常に強靱であって、今風のもつとも新しい京都駅よりも新しいかもしれない。古さと新しさを考え直す非常に面白い素材だと思ったわけです。

しかもそのお宿をやっていたのが若い娘さんだったのも、嬉しいことでした。若い娘さんが実にテキパキと動いている。古いその建物には時間を超えたものを備えていて、それが若さと非常によく合う。

同じようにみごとな町づくりをしているところは日本にいくつかあります。山形県に金山町というところがあって、これは今のような古さを維持するところではなくて、地方にある木組を活かした伝統的な建物ですね。金山様式と建築家は言うようですが、町が百年計画で再生を考えている。これから造る人、あるいは改修する人は町で補助

を出すから金山方式でやってほしいと呼びかける。そうして二十年ぐらいかかってかなり町が様式を持つてきました。これも町づくりとしてとても息の長いしかも立派なやり方だろうと思えます。

4 「郡」という行政単位

大喜町とか金山町は、いわゆる合併しない町です。大きな町につかない、一つの市にしようとしれない。これまで自分たちのやってきた町づくりを活かして、自立するという道を選んだ町です。町が自分たちの考え方と原則を持っていれば、当然ちがう考え方の町とは一緒になれないわけですから、結果としてそうなるわけです。京都の綴喜郡は、字が難しいですが、由緒ある字ですね。「郡」のことを少しお話しします。「郡」というのがどうしてこんなに中途半端なものになってしまったのでしょうか。私はたまたまドイツ文学をやってきましたので、郡ができた事情がよくわかるのです。明治政府がドイツを手本にして新しい国作りをしたときに、まさにドイツの制度を取り入れた。ドイツの場合、郡はクライスと言いますが、その中に村や町がいくつあつて、郡が行政単位として予算権限と自治権を持っています。市と同じ権限です。ドイツでは市はシュタットと言つて強い自治権を持っています。ドイツではこの、市に対して郡が対等にあります。この郡の中で図書館はどこに造ろう、体育館はどこに造ろう、公民館はどこ

がいいだろう、この中の大きな単位の中で公共のものは造つていく。山や河の補修をする。それぞれの町や村はそれぞれの単位として自立しながら、大きなものは郡で考える。

これは非常に合理的です。どの町どの村も同じような施設を造るのではなく、それは郡で考える。郡というのは地理的にも歴史的にもある共通性をもっているところです。その中で考えればいい。たしか日本の古い郡というのは、旧の国名を象っている、あるいは藩を象っている。要するに何百年と続いてきた風土性がある、というところが特徴だったわけです。だから明治政府はドイツと同じように郡を置いた。旅行をしていますと、ときたま昔の郡役所という非常に西洋スタイルの洒落た建物と出くわしますけれども、あれは郡が期待を担っていたときに造られたのでしょうか。建物が見事ですね。みんなの夢が託されていて、多くが歴史資料館というようなものになっています。地元の大工がいろんな勉強をして、ヨーロッパ風を取り入れて、しかし日本の素材で、工夫して造つた、そのまさに知恵の見本のような建物です。

おそらく明治政府は中央集権を進める段階で、郡に権限を与えるのは危ないと思つたのでしよう。もうひとつは地域エゴがあつて、郡が崩壊してしまつた。郡という制度が与えられても活かせなかった。両面があると思います。さきほど、山形の金山町というのは地元古来の建物を非常に上手に活かしていると言いましたが、それは本当

は誉めすぎで、三軒続いて四軒続けばもつとよくなるのに、そこにプレハブあるいは合板の今風の建物が現れる。たぶん私有権とか言い出すとそうなるのだと思います。木組の町はドイツの中部にたくさんあり、世界遺産になったりしています。

みごとに地域なり町なりがその様式を統一してやっている。いいことばかりではないのですよね、共通の利益と同時に、共通の不利益も当然ある。自分たちの家のここに車庫を造りたい、ここにプレハブで建て増しをしたい、と考える人がいて当然です。しかし、みんなで共通の利益を考えて約束したことであれば、共通の不利益も我慢する。その不利益も共同で受け持つ、これが市民生活のルールなのだという考え方で。

ヨーロッパのおそらくどの国でもそうだと思います。この前、チェコとかハンガリーとかへ行きましたけれども、常にそうです。不利益も一緒に我慢をする。日本人はえてして利益は追求しても、不利益はお断りという。そうすれば、三軒続いた四軒目には、プレハブが当然建ちますね。この不利益を我慢することができなくなりました。

5 日本の再発見

いま特に日本で進行していることで、とりわけ悲しいのは、由緒ある地名が消えていくことです。古くからの町の名前が消え、とんでもない名前になる。東がついたり西がついたり中部がついたり、片仮名になったり平仮名になったり。地名という

のは貴重な文化であって、これほど文化を粗末にする国は世界に類がないでしょうね。非常に野蛮だと思えます。旅行していて切なくなることもありますね。

日本という国は世界地図でみますと小さいですが、実は大きな国なのです。沖縄から北海道までたしか三千キロちかくあります。これは中国の南から北までとほぼ等しいのではないですか。しかも気候的に沖縄の亜熱帯から北海道の亜寒帯まで広がっている。かつて女性は夏は「あっぱっぱ」という一枚だけの服を着ていましたけれど、あれは亜熱帯には一番合った服だった。冷房が普及してなくなりましたが、ああいう服装でいられる国です。南の方では桜前線が言われているのに、北では吹雪いている。桜の花が咲き始めて咲き終わるまでに五ヶ月かかる。そうすると、一年の半分近くを同じ花が順に咲いていく。これも詳しく調べたわけではありませんが、恐らく世界にないのではないのでしょうか。一つの花が一つの国の中をゆつくりと北上していくなんて、こういう植生は他には考えられない。

6 金比羅探訪記

二十年使っていた万年筆がこわれたものですから、金比羅山に奉納しようと思ひ立ちました。浪曲の清水次郎長シリーズに「石松代参」がありますね。親分から大願が成就したから刀を納めに行ってくれ、と石松がたのまれる。金比羅山は、代

わりに誰かがお参りする仕組があつて、災難を免れたり、悪いことを避けることができた場合が多いのですが、そういうときにはお札としてお参りをする。長年お世話になった万年筆を捨てるのは忍びなかったもので、ついでもあつて金比羅山に行きますと、参考館といういろんな人がいるんなものを担ぎ込んだ博物館があります。スターンさんという明治時代に日本に来て日本贖戻だったというアメリカ人が、いろんなところにお札を貼り廻る趣味があつてお札博士と言われていたようですけれども、その人が奉納した額があつて、その額の裏にちょうど隙間が空いていましたので、係の人の目を盗んでそこにすつと万年筆を奉納しました。ですから私の万年筆はスターン博士の額の後ろにあります。

金比羅山というのは非常に面白い神社で、もとは印度の神のコンピラに因むとか、いろんな説がありますけれども、今の琴平（ことひら）ではなく、金比羅（こんびら）と言いますが、名前自体が不思議な発音でしょう。昔は大権現であったものが、神仏が明治の分離のときに神社になった。私は石段が大好きで、奥の院まで行きますと千三百六十二段でしたか。万年筆奉納と同時に石段をきつちり歩いてみたいという目的がありました。特に参道から仁王門に至るところは巨大な石の建造物です。十八世紀くらいですか、江戸の後半に造ったようですね。あのころですから、クレーンがあるわけでも機械があるわけでもない

のに、あれだけの石をどうして上げたのだろうか。また、あの石がどこから運ばれてきたのか。ああいうものを造る技術を持っていたことと、ああいう巨大な石の建造物にあたるようなものを造った。殿様が命令したものではない。將軍が造らせたわけでもなくて、石垣とか玉垣とかの彫り物に、千人講とか万人講とかありますが、千人、万人がみんなでお金を出し合つて講を作つて、その講を代表する誰かがお参りして寄進をして、お札ももらつて帰つてみんなに配る。そういう形で基金が集まる。民衆が造つた建物であり、石段です。あの壮大な石の造り物がとても好きで、こんどは金比羅歌舞伎がある四月に、あの石がどこから運ばれてきたのか、あの石を運ぶ技術がどういう形で応用されたのか、そういうことをちよつと調べてみたいと思つています。この前、金比羅に行ったときに関係する本をいくつか手に入れたのですが、石をめぐる研究書には出くわさなかつた。一番不思議なことと思うところが、研究されていない気がする。

列車で行つて、昔の宇高連絡線ですか、宇野からフェリーが出ていて、それを利用します。島がいかにか荒れているかがよくわかります。丸裸の島がいくつもあります。あれは、公害問題が起ころ前に精錬所から出た硫黄で植物が死に絶えたわけで、一度人間が破壊するとなかなか戻らない。

宇野の背後の山などよく見えて、そこがずつと切り刻まれています。今回初めてそれに気がつき

ました。私は姫路出身で、ふるさとに宝殿ほうでんという石の産地があつて、「石の宝殿」と言われてきました。瀬戸内の花崗岩と、石の切出し、運び出しなどを組み合わせて大きなものを造る技術とが、かつてはきちつとあつた。古来の技術と石に対する考え方、いろんなものが集合して金比羅という非常に面白い神社ができたと思つています。旅行をしますと、途中でも目的地でも、いろいろ刺激されるものがあります。